

お名前	性別	満年齢	終戦時の年齢	現住所
おおいわ せつこ 大岩 節子	女性	76歳 H27.8.15 現在	6歳	中宇利

「浜松から田原へ疎開 ～ 母の愛に守られて」

終戦の時、私は国民学校の1年生でした。父は、昭和17年（1942）頃、私が3歳の時に赤紙で召集され、満州の牡丹江へ出征したと思います。ですから、父の顔はよく覚えていませんでした。終戦後にシベリアに抑留され、昭和22年（1947）に舞鶴へ帰りました。父が戻るまで、私の家族は母、祖母と弟の4人でした。大黒柱の父親がいない女子どもだけの生活は、本当に心細く淋しいものだと子ども心に刻まれています。

○ シベリアに抑留された父

私の父は大正3年（1914）生まれでした。家に帰ってきた時の父の顔は、栄養失調で顔はぶくぶくに腫れていました。父の戦友で、佐久間にあった中部電力の所長になられた三浦さんという方が家を訪ねてきたことがあります。抑留されていた頃の食糧事情は最悪で、食べものがろくに与えられず、いつも空腹で重労働を強いられ、栄養失調で亡くなる人も多かったそうです。松の実を食べたり、馬のエサにするこうりゃんをくすねて、内緒で煮て食べたりしたそうです。シベリアではたびたび移動があったそうです。ある時、父の作業部隊が他の地に移動することになりました。こうりゃんは隠して埋めてあったそうです。父のいた所に他の作業部隊が来たそうです。その部隊の中に、元同じ部隊だった三浦さんがいたんだそうです。父は三浦さんにこうりゃんの隠し場所と、食べ方を教えたそうです。訪ねてみえた三浦さんは、そのこうりゃんのおかげで生き延びることができた、と何度も言っていました。父が持ち帰った飯ごうと水筒があり、これで命をつないだんだとしみじみ思いました。

○ 間一髪の空襲体験

私の家は浜松城に近い下池川というところにあり、昭和20年4月から浜松北国民学校へ通っていました。家の近くに小高い山と軍事工場があったように思います。そのためか、夜中でも偵察機が写真撮影のために何度かやってきました。その頃は、学校が始まる前に警戒警報がしょっちゅうあり、警報が鳴ると家に帰されました。ある時は、家に着く前に空襲警報に替わり、B29が上空に飛んで来て、恐くて必死に走って帰りました。近くに爆弾が落とされ、家が壊され、大きな穴が空いているのを見ました。次は私の家かと不安になりました。

また、当時は灯火管制のため、電球に黒い布をかぶせ明かりが外にもれないよ

うにしていました。見回りがあって、明るく見ると注意されました。夜は真つ暗闇の世界が当たり前でした。

空襲警報は毎晩のようにあり、夜でも起こされます。家の庭木の下に、女手で掘った浅い防空壕に逃げこむのです。家族4人が入れるだけの大きさで、木を渡して上に畳を置いただけの防空壕で、爆弾が落とされればひとたまりもありません。いつ死ぬのかと思うような毎日でした。

その防空壕で不思議なことがありました。私はトイレが近かったものですから、夜中に防空壕を出て用足しをすると、おしりのあたりが青白く光るのです。消そうとしてもなかなか消えないのです。何回かそんなことがあり、とても気味悪かったです。リンが燃えると聞きましたが、人魂のように見えて恐かったです。

浜松への空襲を心配した田原の実家の母親が、疎開させるために迎えに来ました。母も危ないと感じていたようで、田原へ疎開することになりました。母は浜松駅まで切符を買いに行きました。疎開のために大勢の人が切符を求めて並んでいたそうです。母の順番が近づき、あと2、3人というところで警戒警報が鳴りました。仕方なく母親は駅の前に掘られた防空壕に避難しました。ところが空襲警報ではなかったため、他の人たちはまだ並んで切符を買い求めていたそうです。すると、その直後に浜松駅が空襲に遭いました。母は間一髪で難をまぬがれたと話していました。これが4月30日の空襲ではないかと思えます。

浜松の町には軍需工場や航空隊の基地があったためか、町に軍艦マーチがいつも流れていました。軍歌で士気をあおり立てるのです。私は軍艦マーチが大嫌いでした。



空襲後の浜松市：HP 浜松空襲の画像より

○ 疎開した渥美でのこと

渥美に疎開したのは5月だったと思います。私たちが疎開した後、6月18日の夜、浜松大空襲がありました。「あのまま浜松にいたら、きっと命はなかったよ。」と母と祖母が話をしていました。

父親が復員する昭和22年まで田原にいました。疎開先は田原本町にある旧家で金物屋さんです。でも、私たちは疎開してきた厄介者ですから甘えるわけにはいきません。母は、大切にしていた父親の使っていた服を持って物々交換に行きました。母は私たちを養うために昼間は働きに行っていたので、夜に出かけるんです。日暮れになってリヤカーに2年生の私と1年生の弟を乗せて、母がひき、祖母が押していくのです。野田というところまで行くと、もう真つ暗になっていました。サツマイモやジャガイモに交換してもらったことを覚えています。食べ

るものもなくてひもじかったけど、それほど辛いとは思いませんでした。みんなが貧しかったし、家族が同じものを分け合って食べ、母の愛情をいっぱい感じながら育ったからだと思います。

当時食べたものでよく覚えているのは、イナゴとドジョウで、どちらもみそ汁に入れました。イナゴは自分でとりに行きました。布の袋に竹の筒を刺し、そこからイナゴを入れるのです。イナゴは1日おいてから蒸し、それを干します。それをすりこ木で粉にし、みそ汁に入れるのです。貴重なタンパク源になっていました。

母がよく唄ってくれた歌があります。「戦友」という歌です。その曲はとてもさみしい歌詞とメロディーでした。父のことを歌ったように感じて、父の姿を思い浮かべました。お父さんはつらい思いをしているんじゃないか、早く帰ってきてほしい、と思うと涙が止まらなくなるのです。涙を母に見せたくなかったのですが、私にはとてもできないことでした。

艦載機に追われて、空の機銃掃射を受けたことがあります。きっと他の町を攻撃した後だったのだと思いますが、本当に殺されると思いました。アメリカ軍の兵士は攻撃される心配がありませんから、無抵抗な一般市民に、遊び心でそんなことをしたんです。許せませんよ

田原に3年ほどお世話になりましたが、父が復員後、私たちは豊橋に住むことになりました。田原の生活は貧しかったけど、私にとってはとても懐かしい体験として心に残っています。田舎に住みたいと考えるようになって中宇利に来たのも、田原の経験があったからです。

○ 戦後70年に思うこと

銃を持つ手はやめて、みんなで国づくりをしてきたこの70年、頑張って守ってきたこの平和を二度とこわしてはなりません。平和を守るための防衛費と政治家は言いますが、その膨大な予算を福祉に回すことはできないのでしょうか。

女性の社会参加を奨励するこの頃ですが、子供は誰が育てるのですか。せめて母親の肌の温もりが必要な3歳までは、自分の手で育てられる社会であってほしい。子供は物でもお金でもありません。親の愛がほしいのです。

やさしい心を持った子供達を未来の国の再生産として送り出し、平和な次の世が続くことを期待します。

戦友
ここはお国を何百里
離れて遠き満洲の
赤い夕日に照らされて
友は野末の石の下